

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

No.33 2010.9



第38回朔太郎忌

「萩原朔太郎の女性像」

高橋 順子

平成二十二年五月九日に開催された第38回朔太郎忌で、詩人の高橋順子さんによる講演が行われました。以下にほぼ全文を掲載します。

今日はお招きいただき、ありがとうございます。

さつき、壇上の萩原朔太郎先生の写真を見て、それからその下になんてよく似た方がいらつしやるんだろうと、しげしげ眺めていましたらお孫さんの朔美さんでした。今日はさつそくいことがありました。

大学の三年生の時に仏文科の友人が『月に吠える』を買ったらしいと言ってくれまして、復刻版が出たばかりだったんですけど、千五百円で。それを買って読み始めて本当に震撼させられました、もったいなくて、一晩に一つだけ詩を読むことにしました。それが本当に決定的なことだったんだと今更ながら思います。おかげで私も詩を書くようになりました、詩を書いてきて良かったし、面白かったし、その感謝をまず、申し上げなければいけないと思います。

今日は昔の話ではなくて、私が萩原朔太郎の詩を読んでこういうテーマだったら面白いなと思ったことをお話させていた

だきます。

私はこの冬から春にかけて詩の解説を書く仕事をしておりまして、今、小学館から「永遠の詩」という全八巻の詩のシリーズが出ていまして、この五月末に萩原朔太郎と八木重吉の二冊が出て完結なんです。小学館の人が言うには、今、出版不況で何を出しても売れない。だからもともと売れない現代詩を出せるチャンスだつていうんです。それで企画が通つて、二冊ずつ、隔月で配本していくということが決まりました。第一回配本が、金子みすゞ、茨木のり子だったんですが、なんとこの間重版を出しまして、詩は不況に強いのかなと思っております。百三十ページにも満たない薄い本なんですけれども、詩の一つ一つに鑑賞文を付しました。小さい字で。私が担当したのは、茨木のり子、中原中也、宮沢賢治そして萩原朔太郎です。で、そういう仕事がありましたものですから、二ヵ月間ほど朔太郎漬けになっていましたので本当に良いときにここへ招いて下

さったと思っています。詩を選ぶのも鑑賞を書く者がやって良
いということでしたので、薄い本なんですけれども、朔太郎の
詩、特に『月に吠える』は短い詩が多いものですから、全部で
五十八編収録することが出来ました。そうすると編者特権とい
いましょうか、有名な詩ばかりではなくて好きな詩も入れてし
まいました。世の中には、萩原朔太郎の詩集の中で『月に吠え
る』派と『青猫』派と『氷島』派と、どうも三つぐらい分か
れていまして、私はもう『月に吠える』派なんです。ですから『月
に吠える』の比重が多い詩集になりました。

その仕事を終えてここで話すにはどういうテーマがい
いかなと思っただんですね。例えば、言葉の手法についてつい
うのも面白いかなと思っただんですが、なにか学校の先生がお話
しているようになって、自分もあんまり面白くない。詩の中
の女性像についてあれこれ考えることが面白いんじゃないか
と思いました。

朔太郎に働いていた女性の引力

萩原朔太郎は音楽的、宗教的人間にして、どうも若い頃は陰
気な人だったようだと書いてあるのも見たんですけれども、詩
人本人が書いたものから見る限り、私が想像しますに、快活で
非常に頭のいい人だったと思います。でもどちらかといえば女
性的な男性だったのではないか。『月に吠える』の中にも、女

装して白樺の幹にすがりついて接吻して、というようなことを
書いて、発禁処分になった詩もありますけれども、女性的な人
だったんじゃないかな。でも詩人には女性的な人が大変多いで
す。誰しも男性的な部分と女性的な部分があつて、詩を書く男
性は特に女性的な部分で詩を書いている人が今は多いんじゃ
ないかと思います。朔太郎には女性の引力が、かなり働いてい
るんじゃないかなと検討をつけました。

詩の中では「浦」という幽霊の女性が有名で、『月に吠える』
派の人は、大抵この「浦」という女性が好きなんです。こ
の女性が生きている
女よりよほど生き生
きして魅力的なん
です。私がもしペン
ネームをつけると
したら、「浦」をも
らいたいぐらいで
すね。高橋順子とい
うのは、高橋が旧姓で
結婚前の本名です。
で、女性像を見てい
く上で詩人の精神の
ありようなどがわか
ったらいと思つて



います。お配りした資料の一番初めに「山に登る」という詩があります。これは『月に吠える』のお終いの方にあるんですが、さりげなくて素敵な恋愛詩です。ちよつと読んで見ます。さつきとても良い朗読を聞かせていただいた後で、なんですけれど、資料として読みます。

山に登る

旅よりある女に贈る

山の頂上にきれいな草むらがある、

その上でわたしたちは寝ころんでゐた。

眼をあげるとほい麓の方を眺めると、

いちめんにひろびろとした海の景色のやうにおもはれた。

空には風がながれてゐる、

おれは小石をひろつて口にあてながら、

どこといふあてもなしに、

ぼうぼうとした山の頂上をあるいてゐた。

おれはいまでも、お前のことを思つてゐるのである。

この最後の一行がふいに肉声が聞こえてすごく良いですね。この詩はわざとなんてしようけれど、「わたしたちは寝ころんでゐた」と始まったのが、「眼をあげて」遠くの方を眺めるの

は一人きりの「おれ」なんですよね。「わたしたちは」が「おれ」一人になつてしまふ。景色はぼうぼうとしているんですけども、ぼうぼうとした時間ものの中に入つてきている気がします。こういうところは言葉の手品つていうのかしらと思うんです。全集を見ますと草稿には添書があつて「旅中より」E女に」とあります。E女つていうのは、エレナの略ですね。初恋の女性、馬場ナカ（結婚してからは佐藤）で、洗礼名がエレナです。ですから、『月に吠える』の中にエレナがいるというのか、『月に吠える』という詩集の中に、エレナを思う気持ちが通奏低音のようにきつとあるだろうと思つています。このことはまた、あとで申し上げたいと思います。

朔太郎にとつての女性

それから「寝台を求む」というのは『青猫』の中の詩なんです。が、この詩を私は、なにか冗談かなと思つていたんですね。「娘たちは 猿に似たちひさな手足をもつ」とか「私たち男の心はまづしく／いつも悲しみにみちて大きな人類の寝台をもとめる」なんてありますけれども、娘たちは人類からどうも外れてゐるみたいで。最初は何とも思わなかったんですけども、読み返していくとさうとう酷いことを書いています。ちよつと読みます。

寝台を求む

どこに私たちの悲しい寝台があるか

ふつくりとした寝台の 白いふとんの中にうづくまる

手足があるか

私たち男はいつも悲しい心である

私たちは寝台をもたない

けれどもすべての娘たちは寝台をもつ

すべての娘たちは 猿に似たちひさな手足をもつ

さうして白い大きな寝台の中で小鳥のやうにうづくま

る

すべての娘たちは 寝台の中でのしげなすりなき

をする

ああ なんといふしあはせの奴らだ

この娘たちのやうに

私たちもあたたかい寝台をもとめて

私たちもさめざめとすりなきがしてみたい。

みよ すべての美しい寝台の中で 娘たちの胸は互に

やさしく抱きあふ

心と心と

手と手と

足と足と

からだとからだとを紐にてむすびつけよ

心と心と

手と手と

足と足と

からだとからだとを撫でることによりて慰めあへよ

このまつ白の寝台の中では

なんといふ美しい娘たちの皮膚のよろこびだ

なんといふいぢらしい感情のためいきだ。

けれども私たち男の心はまづしく

いつも悲しみにみちて大きな人類の寝台をもとめる

その寝台はばね仕掛けでふつくりとしてあたたかい

まるで大雪の中にうづくまるやうに

人と人との心がひとつに解けあふ寝台

かぎりなく美しい愛の寝台

ああ どこに求める 私たちの悲しい寝台があるか

どこに求める

私たちのひからびた醜い手足

このみじめな疲れた魂の寝台はどこにあるか。

朔太郎はアフォリズム集『虚妄の正義』という本を書いていまして、ここの「結婚と女性」という章の最後の方なんですけど、「婦人を愛するには」という題で書いていまして、これが非常に重要な文章だと思うんです。当時、萩原朔太郎はニーチェを愛読していたようで、その影響で多分、アフォリズムなどを書

くようになつたんでしょうが、ニーチェは女性蔑視者です。この人の文章にまあ、力を得て、女性侮蔑の言葉を書き連ねてきたのかなという気がしますけれども、当時、女の人の読者、萩原朔太郎の読者はいなかったのかなあなんていうことも思いました。詩人の胸には聖なる、恋人が一人住んでいるんですけど、一般の女性は、まあ家畜に等しいと言つてます。こういう文章でちよつと長いんですけれども紹介します。「中世紀の騎士のやうに婦人を全くの音楽的幻想として、」と始まりますが、朔太郎自身も身に覚えがあると思います。「近づくことのできない、また近づいてはならないものとして——騎士たちは、二つの寝台の間に剣を横たえた。——遠くから匂いを嗅いでゐるか、も一つは、我々のだれもがするやうに、ずつと粹な仕方で彼等を慣らし、無邪気な愛らしい家畜として戯れるかである。前の仕方によれば、吾人は永久に女神への思慕と奉公をつくし得る。その遠くから匂つてくる白粉や肌の香は、いつも我々を夢みるやうに、幸福に導いてくれるであらう。もし後の仕方によれば、同じやうにまた我々は幸福である。なぜといつて我々は人間であり、彼等は人間でないもの——可愛らしい家畜——である。」本當にこう思つて「寝台を求む」という詩は本気で書いたんだなと分かります。「そしてどんな人々も」と続きますが、どんな人々もつていう人々の中には女は入っていないんです。「仔犬のいたづらや、愚かさや、嫉妬深さや、無自覚や、エゴイズムや、野卑や、下劣さに腹を立てない。のみならず犬が

犬らしくあるほど、それが益々可愛らしく、愛嬌ありげに見えるのである。」なにか怒るのもちよつとできないぐらい面白い。「かくの如く、我々はしなければいけない。即ち我々の頭の上に、遠く天上界にまで彼等を置くか。でなければ反対に、彼等を我々の寝台の下に、ずつと低い地位に見るかである。しかしながら我々は、両者の中間を避けねばならない。女神でもなく、家畜でもなく、我々の同じ種族として、人間として婦人を愛したり、取扱つたりするのは、決して絶対に避けねばならない。それは婦人に対する礼儀でなく、また親切の仕方でもない。なぜならば彼等は、それによつて耐へがたいものになつてくるから。あまつさへ我々は、愛によつて恵まれる筈の、特別の幸福を無くしてしまふ。」まあ、大変なことを言つてます。でもこれが、萩原朔太郎の氣質かもしれないです。

強い腕に抱かる

風にふかれる葦のやうに

私の心は弱々しく いつも恐れにふるへてゐる

女よ

おまへの美しい精悍の右腕で

私のからだをがつしりと抱いてくれ

このふるへる病氣の心を しづかにしづかにだめて

くれ

ただ抱きしめてくれ私のからだを
ひつたりと肩によりそひながら

私の弱々しい心臓の上に

おまへのかはゆらしい あたにかい手をおいてくれ

ああ 心臓のこのところに手をあてて

女よ

さうしておまへは私に話しておくれ

涙にぬれたやさしい言葉で

「よい子よ

恐れるな なにものをも恐れなさるな

あなたは健康で幸福だ

なにものがあなたの心をおびやかさうとも あなたは

おびえてはなりません

ただ遠方をみつめなさい

めばたきをしなさるな

めばたきをするならば あなたの弱々しい心は鳥のやう

に飛んで行つてしまふのだ

いつもしつかりと私のそばによりそつて

私のこの健康な心臓を

このうつくしい手を

この胸を この腕を

さうしてこの精悍の乳房をしつかりと。」

この詩にあるのは、未成熟の男とその愛人という関係です
ね。萩原朔太郎には幼児性があつたと思われれます。「女よ」つ
て呼びかけられている女が、「よい子よ」つて男に返してます
ね。ですから、大変、母性愛の豊かな女でしょう。でも実際
こんなふうに話す女はどこにもいません。日本にもいない、外
国にも。そう考えると外国の書物の中から現れた巨大な女神の
ようでもあります。こういう女性が理想だったのかもしれない。

伊藤信吉さんはこの詩は、象徴詩として読めるとかつて言っ
てますね。自分がいろいろ、こう、打ち砕かれているときに、
女性的なるものよ、私を慰めてくれというふうにお説みになつ
たようですが、私は象徴詩というよりは朔太郎の女性観がよく
出ているんじゃないかなと思います。『虚妄の正義』の中にも
職業婦人というものが出てきたと書いておりまして、強い女性
である職業婦人については悪くは書いてないんですね。自分た
ち男が「著しく柔和な女性的性格者」になつてしまつたと書い
ています。男がその「文明とともに軟化」して行つたというこ
とも書いています。

ですけれども『絶望の逃走』というそれから六年後に出た本
では、職業婦人のことはもう褒めてはいないんですよ。昔は、
職業婦人というのは「近代の恋人」だったけれども、今、失業
者の男たちの敵意と嫉妬を買っている存在だ。今は職業婦人
たちは、「八百屋の女房や何かと共に、裏町のセチがらい経済

学的存在に過ぎなくなつた。」なんて書いてます。でもやっぱり男の未来や仕事を奪つたとか敵意とか嫉妬とか、私などでさえ、聞いた覚えがありますね、若い頃ですけれどね。だから昭和十年、私はまだ生まれてませんけれども、あつたに違いないと思いますね、こういう空気は。

「遺伝」という詩、こういう詩は朗読の上手い人が読んで下さるといいのになあと思うんですね。



遺伝

人家は地面にへたばつて

おほきな蜘蛛のやうに眠つてゐる。

さびしいまつ暗な自然の中で

動物は恐れにふるへ

なにかの夢魔におびやかされ
かなしく青ざめて吠えてゐます。

のをある とをある やわあ

もろこしの葉は風に吹かれて
さわさわと闇に鳴つてゐる。

お聞き！しづかにして

道路の向こうで吠えてゐる

あれは犬の遠吠だよ。

のをある とをある やわあ

「犬は病んでゐるの？お母さん。」

「いい子供

犬は飢えてゐるのです。」

遠くの空の微光の方から

ふるふる物象のかげの方から

犬はかれらの敵を眺めた

遺伝の 本能の ふるいふるい記憶のはてに

あはれな祖先のすがたをかんじた。

犬のこころは恐れに青ざめ

夜陰の道路にながく吠える。

のをある とをある のをある やわあ

「犬は病んでゐるの？ お母さん。」

「いいえ子供

犬は飢ゑてゐるのですよ。」

これは『青猫』からですが、『月に吠える』の犬よりも輪郭がこう、くつきりしてきてるなっていう感じがします。子供は犬が遠吠えするので気持ち悪いなと思つてお母さんに犬は病気のなの？って聞くんですけれども、お母さんの方はそんなこと考えないんですね。お母さんは健康で、強圧的。だから、野良犬だから飢ゑてるに決まつてるでしょ、と思うんですね。だから「いいえ子供 犬は飢ゑてゐるのですよ。」とぴしゃつと言うわけですね。萩原葉子さんの『父・萩原朔太郎』によると、お母さんという方は、息子が可愛いいで、あれこれ世話を焼いたそうなんですけれども、とても強権的な、強い母で、葉子さんにとつてはお婆ちゃんなんですけれども、強い人だったということです。そのお母様の面影があるんじゃないかなと思います。で、いよいよ「浦」が出てきます。

「エレナ」と「浦」

「猫の死骸」、「沼沢地方」は『萩原朔太郎詩集』にあります。さつきエレナのところで、小松郁子さんのご本のことを紹介し

ようと思つたんですが、この方は詩人できて、詩には、やつぱり萩原朔太郎の影響がかなり感じられます。特に『猫町』かな。『鴉猫』という詩集があつて、その中の表題作に、村長さんの娘が「あの方よ」と指すのが猫だつていう、短い詩なんですけどね、ちよつと怖い詩を書く人でした。小松さんが打ち込んでいた仕事は『萩原朔太郎ノート』なんです。『萩原朔太郎ノート』三部作というのを出されました。『萩原朔太郎ノート作品考―乃木坂俱樂部』他―、『萩原朔太郎ノート「女人」考―「氷島」の恋愛詩をめぐつて―』。さつき高校生の方が朗読してくださいましたよね、「昨日にまざる恋しさの」。あれも『氷島』の中の恋愛詩です。人によつては「青猫（以後）」のところで「浦」が出てきて、その後朔太郎の詩にはもう女は出てこないという人もいるんですけれども、『氷島』の中には恋愛詩というのはいくつ編ぐらいあつて、女は出てくることは出てきてるんですよ。小松さんが『萩原朔太郎ノート「女人」考―「氷島」の恋愛詩をめぐつて―』つて一冊書いているくらいですから。それから『萩原朔太郎ノート「ソライロノハナ」私考』。「ソライロノハナ」というのは、没後に見つかった歌集ですね。初期の短歌です。今回の講演ではこの本がずいぶん役に立ったというか、助けられました。小松さんはこの本の中でエレナを追いかけてるんですね。追いかけてるといっても、もう、死んでしまった人ですから、エレナの甥御さんに会つたり、それから、二つで死に別れた娘さんに会つたり、妹さんに会おうとしたりして、電話で

はしゃべったんですけれども、エレナの妹さんの娘さんが会わないほうがいいと言ったとかで、会えなかったとか、いろいろ訪ね歩いて、それから、エレナが亡くなった場所、鎌倉の七里ヶ浜の療養所、この辺りも行つて、七里ヶ浜の砂をハンカチにすくつて来たり、そういうことをしてるんですね。

エレナと朔太郎二人の年表が上下段に分けて巻末についてましたので、ごく簡単に言いますと、朔太郎は明治十九年生まれですけれども、それから四年後、明治二十三年にエレナ、本名馬場ナカですね、生まれてるんです。で、二人の出会いには明治三十七年正月のカルタ会です。満年齢で言うとなつては十七歳、エレナは十三歳。それから十九歳の時に、馬場ナカはお医者さんの佐藤さんと結婚するわけです。で、エレナが洗礼を受けたのは大正三年。亡くなったのは、大正六年、二十六歳と十一ヶ月です。小松さんは、エレナは写真では深い思い詰めた目をしていて書いています。さつきこちらの文学館の方に、エレナがきれいに写っている写真があつたら見せてと頼み込んで、見せてもらいました。朔太郎は逆三角形の顔がどうもお好きだったようで、あつて本当逆三角形だなど思つたんですが、そうですね、やつぱりでも、靈的な感じがしたかな。

小松さんは本の中で、エレナはいつも向こう向きの姿しか見せていないっていうのを何か所かで書いていらつしやるんですね。なんかつかめない、なんか人間的なエピソードを知りたいと思つたんでしようけれども、どうも聞き出せなかつたよう

です。エピソードとしてはですね、朔太郎がエレナを、彼女が結婚した後なんですけれども、音楽会に誘つたところ、白紙の返事をよこした。朔太郎はある時期だけ日記を書いていたようですが、そこにエレナの奴が白紙の返事をよこして、それは火にあぶつても水に入れてみても白紙だつて、怒っているんです。その年の秋二人で月蝕を見て、その後部屋へ帰つてから真っ青になつて、震えていたというんですね。これはやつぱり重要なエピソードなのかな。恋人と二人月蝕を見て何かこう、感ずるところがあつたのかもしれないですね。

小松さんはその時の出会いが『月に吠える』の中の「浄罪詩篇」という、竹とか、松の枝に折れるさまに吊るされぬとか、ああいうのが「浄罪詩篇」ですが、「浄罪詩篇」の溢れるように出て来た因をなしたといえるのではあるまいか」と一行ぐらいで終えているので、もうちよつとこう、論考して下さるとよかつたんじゃないかなと思うんですけれど。私が思うには、「浄罪詩篇」の垂直性とか急進性はエレナに対する恋を「われらの聖なる遊戯」と記していることに重なるのではないでしょうか。女を一方で女神と讃える、そういう気持ちの対象がエレナであつたわけなんです。そうするとエレナこそは朔太郎のミューズ、詩の女神であつたと言えるんじゃないかなと思うんですが。何が直接のきっかけになつたのかわかりませんけれども、朔太郎は自分が「原罪」というのを漠然と持つていて意識していたと思うのですが、「原罪」を意識して、こう、垂直に

降下していく、そういう精神の運動は凄いなと思います。大詩人たるゆえんです。

さつき「寝台を求む」のところで言い忘れましたけれど、『水鳥』という詩の中に「殺せかし！ 殺せかし！」っていう詩があるんですが、その中に「我れはもとより家畜なり 奴隸なり」という言葉があるんですが、でもこれは、マゾヒスティックな性愛の一シーンではないかなと私は思いましたけれども、しかし迫力があるんですね。

死んだ「エレナ」と「浦」っていうのはイコールではないんですけれども、朔太郎の頭の中でいろいろ、エレナから靈感を得て作り上げた女性が「浦」なんですが、「浦」はこの詩で見ると、凄艶にして哀婉だと思います。

「猫の死骸」というのを読みます。

猫の死骸

海綿のやうな景色のなかで
しつとりと水気にふくらんでゐる。

どこにも人畜のすがたは見えず

へんになしげなる水車が泣いてゐるやうす。

さうして朦朧とした柳のかげから

やさしい待びとのすがたが見えるよ。

うすい肩かけにからだをつつみ

びれいな瓦斯体の衣裳をひきずり
しづかに心霊のやうにさまよつてゐる。

ああ浦 さびしい女！

「あなた いつも遅いのね」

ぼくらは過去もない未来もない

さうして現実のものから消えてしまつた。……

浦！

このへんてこに見える景色のなかへ

泥猫の死骸を埋めておやりよ。

この詩は凄く好きなんですけれど。朔太郎の言葉は面白くて、ああいいなあと思つてみると、「へんてこに見える」とか、それこそへんてこな言葉が出てくるところがユニークと言えばユニークですが。「浦」という名前がいいんですよね。捉えどころのない響きがありますよね。それから『月に吠える』の巻頭の詩、「地面の底の病氣の顔」というところに、「うらうら草」というのが出てきますね、「うらうら草の茎が萌えそめ」つていう。これ、「うらうら草」かもしれないけれども、でも、ぺんぺん草つて言いますからね、私は「うらうら草」と読みたいですね。はこべなんかも、日の当たらないところでは長く伸びますから、きつとああいうような「うらうら草」でしょう。冥界をイメージして「うらうら草」と「浦」っていうのがつながっていくような気がします。朔太郎自註によりますと、「泥

猫の死骸」が象徴するものは、彼の家庭生活全体で、「不吉な呪われた虚無の實在」としています。奥さんと不仲になるんです。『萩原朔太郎詩集』の中の序文にもう自分は一切のものに別れを告げる、そういうようなことが書いてありました。それは、次の詩ですね。「もう別れを告げよう」とあるのに呼応するものです。

「沼沢地方」これも読ませていただきます。

沼沢地方

蛙どものむらがつてゐる

さびしい沼沢地方をめぐりあるいた。

日は空に寒く

どこでもぬかるみがじめじめした道につづいた。

わたしは獣けだもののやうに靴をひきずり

あるひは悲しげなる部落をだづねて

だらしもなく 懶惰ろんだのおそろしい夢におぼれた。

ああ 浦！

もうぼくたちの別れをつけよう

あひびきの日の木小屋のほとりで

おまへは恐れにちぢまり 猫の子のやうにふるへてゐた。

あの灰色の空の下で

いつでも時計のやうに鳴つてゐる

浦！

ふしぎなさびしい心臓よ。

浦！ふたたび去りてまた逢あふ時もないのに。

とても情感のこもった良い詩だなと思います。その「浦」は不思議な、いつでも時計のように鳴っているふしぎな寂しい心臓をもっているというので、音楽を志向している。「青猫を書いた頃」という文章の中に、「私は枕時計の鳴るオルゴールの歌を聴きながら、心の郷愁する怪しい地方を巡歴した。」と書いてあります。ここで、あ、そうかと思つたんです。このオルゴールの歌を「浦」の心臓の音と聞いたんですね。「浦」に「もう僕たちの別れを告げよう」、ということと「これを以つて一切の過去に告別する。」というふうな序に書いてあるのに呼応しているわけです。朔太郎自身の心の中にも「浦」を描出するみずみずしさがなくなってきたのかなと思います。この後には「浦」はもう出て来なくなつてしまふ。

朔太郎の女性観の変化

けれども、『水島』には、さつき申し上げているように、四編の恋愛詩がありますけれども、これらの愛人たちは詩人の精

神に深い影響をもたらしたとは言えないと思うんです。まあ、女性は家畜から下婢になったか、女性があるいは人間に近くなつてしまったのでしょうか。『月に吠える』にあつた垂直性がなくなつて、『氷島』では水平性が目につくんですね。『氷島』の中には名文句がいくらでもありますけれど、例えば「いづこに家郷はあらざるべし」。ちよつとやつぱり言葉が変ですけれどね、「いづこに家郷はありや、家郷はいづこにもあらざるべし」というところで、気持ちが焦っているのか「いづこに家郷はあらざるべし」で、問いと答えと一緒になつてしまっている。そういう文体ですけれど、切迫した様子はよく分かります。でもこれは水平の思考です。家郷、それはやつぱり天上や地下に求める人はいなくて、地上的な中に求めていくわけですから。それから「我れの持たざるものは一切なり」というのがありますね。「我れは何物をも持た



ず」と言うのではなくて、「我れの持たざるものは一切なり」。これも凄いですね。でも所有ということはやつぱり地上的なものですから、垂直軸というか中心的なそういう精神の動きがなくなつてきたと、そう私は見ています。では最後にやさしい詩を読んで、それで終わります。

婦人と雨

しとしとと降る雨の中を、かすかに匂つてゐる菜種のやうで、げにやさしくも濃やかな情緒がそこにある。ああ婦人！ 婦人の側らに座つてあるとき、私の思惟は湿ほひにぬれ、胸はなまめかしい香水の匂ひにひたる。げに婦人は生活の窓にふる雨のやうなものだ。そこに窓の硝子を距てて雨景をみる。けぶれる柳の情緒ある世界をみる。ああ婦人は空にふる雨の点々、しめやかな音楽のめろ、ぢいのやうなものだ。我らをしていつも婦人に聴き惚らしめよ。かれらの実体に近よることなく、かれらの床しき匂ひとめろ、ぢいに就いてのみ、いつも蜜のやうな情熱の思慕をなさしめよ。ああこの湿ほひのある雨気の中で、婦人らの濃やかな吐息をかんず。婦人は雨のやうなものだ。

詩人は女性の多い家庭環境に育つて、身内の女性に大切にさ

だったそうです。では、この辺で終わらせていただきます。

* 本稿は講演録を起したものを高橋さんに加筆・訂正していただきました。

れていたで、このように女性をゆかしく思う詩が書けたのでしようけれど、ちよつと皮肉な面もありますよね。「かれらの実体^⑧に近寄ることなく」と言っているのは面白いですね。萩原朔太郎は臆病な人でもあったのかなと思います。「婦人は雨のやうなものだ。」と言つてますけれども、婦人は豪雨にもなったりする時がありますから、「実体に近寄ることなく」つて言つてるのは、賢いと思います。で、『絶望の逃走』つていうのに面白いことが書いてありますので、これをちよつと紹介させていただきます。「妻の教訓」というのですね。「私の別れた妻が、私に教えてくれた教訓は一つしかない。観念^{イデア}で物を食はうとしないで、胃袋で消化せよと言ふことだつた。妻はいつも食事の時に、もつと生々^{いき}した言葉でこれを言つた。「ぼんやりしないで、さつさと食べてしまひなさい。」なんか食事風景が想像されておかしいですね。朔太郎さんは、ご飯をポロポロこぼすこともあったそうです。考え事をしながらイデアで食べてたんでしようけれども、ここはやつぱり現実的な人は、早く食べなさいつて言うんですね。

女性について散々なことを書いてたりしてますけれども、一方でやつぱり崇め奉つた人がいるということが、萩原朔太郎という人を敬愛するに足る理由だと私は思っています。女神か家畜かという極端な女性観の謎が詩人の胸の中にあつて、それが涸れない詩を汲む井戸になつたのではないかと思われます。エレナという人は前橋の伊勢屋という屋号を持つ薬屋のお嬢さん

高橋順子（たかはし じゅんこ）

詩人。1944年（昭和19）8月28日、千葉県海上郡飯岡町（現・旭市）生まれ。東京大学仏文科卒。

河出書房新社、青土社等の出版社に勤めながら、1977年、第一詩集『海まで』（牧神社）を刊行。1986年『花まいらせず』（書肆山田）で現代詩女流賞、1990年『幸福な葉っぱ』（書肆山田）で現代詩花椿賞、1996年『時の雨』（青土社）で読売文学賞、2000年『貧乏な椅子』（花神社）で丸山豊記念現代詩賞。ほかに、ファンタジー『緑の石と猫』、エッセイ集『うたはめぐる』『草しづく』『恋の万葉・東歌』『一茶の連句』、評論『連句のたのしみ』『富小路禎子』、共著『雨の名前』『風の名前』『花の名前』（佐藤秀明・写真）などがある。「歷程」同人。